38号車「KeePer CERUMO GR Supra」

序盤から石浦選手が粘りの走りで大湯選手に交代、ハイペースでのアンダーカット！念願の3位表彰台！

公式練習の走り出しから好フィーリングを得て、ライバル勢が速さをみせる中GR Supra勢の最上位となる4番手グリッドを獲得。表彰台獲得を目指し迎えた決勝日は、午後から雨の予報もあったが、晴天のもと迎えた。気温35度／路面温度56度という暑さの中、スタートドライバーを務めたのは石浦宏明選手。スタートでは一瞬3番手をうかがう動きをみせた石浦選手だったが、その後GT500クラスの上位陣は膠着状態に。3番手を走る#64「CIVIC TYPE-R GT」を追いながら序盤のレースを進めていった。

今回のレースはSUPER GT でも初めてとなる350kmのレース距離。300kmレースよりもわずかに長く、戦略も重要になる。石浦選手の後方からは、#14「GR Supra」が接近するもののこれを寄せ付けず、逆に15 周を過ぎてGT300 クラス車両が2回目のラップダウンとなると、ふたたび#64「CIVIC TYPE-R GT」とのギャップを縮めていった。

ただスタートからしばらく経ったころになると、フロントタイヤが厳しい状況に陥ってしまい、少しずつペースが落ちてきてしまった。石浦選手は後方から迫る#14「GR Supra」の勢いに少しずつ接近を許してしまう。20周目にテールにつかれると、21周目のメインストレートでサイド・バイ・サイドのバトルを強いられ、先行を許してしまったもののペースは決して悪いものではない。#14「GR Supra」に大きく離されることはなく、31周目までしっかりと5番手を守り戦うと、ミニマムの距離でピットイン。大湯都史樹選手にステアリングを託した。

大湯選手は、すぐにセクターベストを記録するハイペースで走りはじめた。後にピットインするライバルたちを先行するアンダーカットが狙いだ。33周目にピットインした#64「CIVIC TYPE-R GT」、そして34周を終えピットインした#14「GR Supra」を見事に先行。ついに表彰台圏内の3番手に導いていった。

レース後半、少しずつ大湯選手の後方から#14「GR Supra」が接近し始めた。大湯選手は早めのピットインだったことから、後にピットに入ったライバルよりもタイヤや燃料が厳しくなる。350kmが長く感じてくるが、大湯選手は必死にタイヤと燃料をコントロール。後方から迫る#14「GR Supra」に対し1秒前後のマージンをしっかりと保ったままレース終盤戦を進めた。スタートから約2時間。近くに雨雲が近づいていたが、心配された雨は降らず、第4戦はそのままフィニッシュを迎えた。「TGR TEAM KeePer CERUMO」にひさびさの3位表彰台をもたらすことになった。

決勝の日は大湯選手の誕生日。自らを祝うバースデーポディウムとなった。スーパーフォーミュラでの表彰台に続き、2戦連続で富士で表彰台を獲得し、自らの力を証明してみせた。

100号車「STANLEY CIVIC TYPE R-GT」

トップに迫るパフォーマンスを見せ、シーズンベストの2位表彰台を掴む！

初の350kmレースをいかに戦い、チャンピオンシップ争いに食い込むか、チームとしても今大会は重要な一戦になる。そんな中、予選で2位を獲得。

蒸し暑い一日となった決勝日。静岡県警の白バイとパトロールカーのパレードラップからフォーメーションラップへと入る。牧野任祐選手がスタートを担当。ポールスタートの#8「CIVIC」にプレッシャーをかけるようにピタリとマークし、周回を重ねていく。だが、やはり40kgのサクセスウェイトがボディブローのように効き、#8との差が開き始めた。27周目のダンロップコーナーで、トラブルに見舞われたGT300クラス車両の一台がコースサイドでスロー走行の末に停止。これを受けてコース上はFCY(フルコースイエロー)が導入された。ここで#8との差を広げることとなってしまう。その後32周でピットへ車を戻す。山本尚貴選手へとバトンをつないでコースへ復帰する中、#8は翌周にピットへ。惜しくもアンダーカットにはならず、改めて#8を追いかける形で後半戦へと突入。53周を終えると、山本選手は#8との差を一時0.4秒まで縮める気迫のパフォーマンスを披露したが、終盤に入ると、再び2台の差がじわじわと広がる展開に。結果、逆転のチャンスは訪れず、2位でチェッカーを受けた。

61号車「SUBARU BRZ R&D SPORT」

追突で大きく破損、24位でフィニッシュ。

決勝は9番手からのスタート。前後にはGT3勢の大排気量マシンが並ぶ。スタートしてみると集団に揉まれるようなポジションになってしまう。オープニングラップの13コーナー入口で井口卓人選手は後続のマシンに追突され、破損状況は大きくピットインを余儀なくされる。左リヤのバンパー、ディフューザー、フェンダーを大きく破損し、タイヤもパンクする。ピットで応急処置し、タイヤを交換してリスタートするが、すでに2周遅れとなる。その後発生したFCY(フルコースイエロー)では、速度規制制御が解除できないトラブルが発生し、再びピットイン。再びコースに復帰する時、すでに12周遅れとなる。それでも山内英輝選手にドライバー交代をし、タイヤも4本交換をして完走を目指す。リヤディフューザーが半分脱落した状態でも上位チームと同等タイムを出すことに成功しており、マシンのセットアップ方向の正しさは確認できたようだった。

SUPER GT 2024シリーズ スケジュール

	日程	会場
Rd.5	8/31(土)9/1(日)	鈴鹿サーキット(三重県)
Rd.6	9/21(土)22(日)	スポーツランドSUGO(宮城県)
Rd.7	10/19(土)20(日)	オートポリス(大分県)
Rd.8	11/2(土)3(日)	モビリティリゾートもてぎ(栃木県)

2024シリーズは「CERUMO」とタッグを組み、クルマ好きユーザー層に対してKeePerのブランドイメージをより深く訴求していくとともに、日本国中のキーパープロショップ、キーパー施工店を応援すべく、フルカラーのKeePer号でスーパーGT 2024シリーズに挑みます!皆様、応援よろしくお願いします!!

「WEC世界耐久選手権」第5戦ブラジルサンパウロにてTOYOTA GAZOO Racingの8号車トヨタが今季初優勝!!

7月14日、ブラジルのアウトドローモ・ホセ・カルロス・パーチェ(インテルラゴス・サーキット)でWEC世界耐久選手権2024年シーズン第5戦『ロレックス・サンパウロ6時間』の決勝が行われ、TOYOTA GAZOO Racingの8号車トヨタ(セバスチャン・ブエミ／ブレンドン・ハートレー／平川亮組)が今季初の総合優勝を飾りました。

2012年にトヨタがハイブリッドのレースカーによる初優勝を飾ったこの地で、ディフェンディングチャンピオンのブエミ選手、ハートレー選手、平川選手が乗る8号車は、7万3千人ものブラジルのファンの前で今季初勝利のチェッカーを受けました。

新型車 車種サイズ情報

●フォルクスワーゲン /T-Cross
サイズ:Mサイズ(同じ)
(4,140×1,760×1,575mm)
※マイナーチェンジ

●ポルシェ /マカン EV
サイズ:LLサイズ(同じ)
(4,784×1,938×1,623mm)

●ポルシェ /パナメーラGTS /ターボS E-ハイブリッド
サイズ:Lサイズ(同じ)
(5,053×1,937×1,417mm)